

レンダラーズトーク

創立時も今も変わらず、東京はパースの激戦区だったのではないのでしょうか。その変遷を、やはり創立メンバーだった大野さんがどのようにご覧になっているかお聞きしてみます。

ここに綴る文面はこれまでに幾度となく語って来たように思うのですが、JARAが設立30年を迎えた今日、改めて自身の生き方と重ね合わせて振り返ってみたものです。

「起業30年説」なる捉え方があります。私たちの職能や職域はそれぞれの時代のニーズに応じて勃興し、やがて衰退して行くようです。

しかし、継続のエネルギーがあれば「新しい何か」かを掘むことができるものと思うのですが、JARAをはじめ私たちはまさにその時を迎えているようで、新しい技術革新を伴って価値感すらドラスティックに変貌するなかで“FOR THE NEXT SOMETHING NEW”を求め続けることになるのでしょうか。

JARAは1980年に産声を上げ、社会の変遷と共に繁栄を見ると同時に電子技術の進歩によって言わば産業革命期を迎え、手工業的であった制作行為も多くはコンピューターなくして成しえない業態になり、今やその只中であって、それまでの職能を支えて来た知識や技術も大きく変容を遂げているようです。つまり、建築や土木等の工作物を透視図法によって絵画的に表現する職域が確立し、拘わる技術の習得に腐心するなかで、それぞれが自己を表出していたはずですが、それに必要な知識や技術の多くは電子的な思考回路によってことごとく克服され、多くの人々に共有化されたことは「隔世の感」の極みを見ているようです。

パースとは、透視図に絵画的手法を付加した完成予想図を意味しているようですが、制作者として社会に向き合うためには何をにおいても透視図法の習得が必須でした。

しかし現在では、その根幹を成す図学はもとより、素材や光源などを設定することによって多様に自動生成することが可能になり、表現者(レンダラー)として求められる技術や感性は、これまでと大きく異なる資質が求められるようになりました。

これまでのパースは図学に裏打ちされた絵画でしたが、その後コンピューターの出現によってCG表現が主流となり、絵画的な表現から写真的表現に移行したようで、歴史に鑑みれば印象派の画家たちが写真機の登場に脅威を感じたことによく似ているように思うのです。

とは云え、レンダラーが描くべく完成予想図としての使命は「写真のように描く」ことも技法のひとつでしたが、透視図法は図学であると同時に写真光学の理論にも近いものであり、データを数値化して演算することで、人の手を介すことなく図象を表現することが出来るようになったことを思うと、逆に言えば透視図法が図学的に正しかった事を証明することにもなったようです。

このことは算盤の文化が計算機に移行したことに似て、数の概念を身に着けることなく数値を自由に操って答えを導き出せるようになったことに似ています。

振り返れば私にとってこの職業は人生そのものだったと承知するところですが、私のなかの価値観もまた勃興から繁栄をととして、今や時代錯誤にあることも充分理解の範囲と受け止めているところです。

歴史を振り返るまでもなく、何事においても「新しい何か」に向かうことは、新しい問題を提議しそれに立ち向かうことであり、その繰り返しが進歩なのだと思えば、JARAもそれにそむくことなく、拘わる多くの人が新しい価値観を共有して「もうひとつの文化」を大切に育てて行って欲しいと願うところです。

大野 昉 おおのはじめ
1943年東京生まれ
1965年 株式会社 オズ・アトリエ設立
現在に至る

